第５章　高橋和巳と『邪宗門』③

元おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

第三節　宗教的「共同幻想」の披食人願望描写

ひのもと救霊会本部のある神部という土地は、関西地方の盆地に囲まれた実在する場所に想定され、信者の故郷のメタファーとなっている。信者の合言葉は「ようこそお帰り」だ。その平和な山河、のどかな田園がしきつめられた盆地を碧色の鮎川が流れる。『邪宗門』冒頭の「序章」〈その一　何処より〉は、将来三代目教主となる千葉潔を主人公の一人として、かれが幼少のころ母親の遺骨壺を胸から下げてまるで病人のようなみすぼらしい姿で、神部の駅のプラットホームにひとりで降り立ち、「その見知らぬ駅とその町が、あたかも故郷であるかのように少年には思われた」という、天理の「おぢばがえり」（たましいの故郷のメタファー）とかさなるような描写から始まる。

そして、終章においては、終戦直後の昭和21年日本各地で頻発する不思議な集団自殺事件を政府は調査結果を発表し、新聞も事件の全貌をつたえつつ、「狂気の自殺集団」と銘打って、みずから滅び去った「世なおし」を究極の目的とする救霊会を弾劾したことを克明に信者たちの心理描写をまじえて活写している。糾弾する国家・官憲に対して救霊会本部は、盆地を流れる鮎川を決壊させ、その地方を〈泥海〉と化して、三代目教主千葉潔は自殺する。

その潔が少年のころ神部にある城祉の一番高い場所の、しかも一番高い樹の上で、尿意をもよおし、警官に追われている自分がもう逃げ場もなくなったことを忘れて、ためらいながらも結局かれは生理の要求にしたがい、爽快な気分になった。その時にふと昔のことを思い出す場面の潔の言葉は衝撃的だ。樹の上から彼は母の骨を埋めた墓地に向けて、片手だけの礼拝をし、作者は次のように潔につぶやかせる。

> さようなら、お母さん、と潔は小声で言った。……僕はお母さんのいいつけどおりにした。出稼ぎにでたまま帰ってこないお父さんをまって、この飢饉に二人とも餓死するよりは、お前だけでも町へおりなさい、とお母さんは言った。周囲の山の松の甘皮もはがしつくした。蝉の幼虫も自然薯も掘りつくした。ふきもわらびも食べつくした。お母さんはもう動けない。お前も動けないようだけど、私が死んだら、腐らないうちに、まだ少しは残っている私の腿の肉をお食べ。お母さんがそういうのだから、お母さんのだからかまわない。お前と私はもともと同じ血、同じ肉なのだから、神さまもそれだけは許してくださる。いいね。わかったね。お前だけでも生きておいき。……お前は若いから 、食べさえすれば、動けるようになる。泣かんでいい。昔ね、お前をみごもった時に、お母さんはお前を堕そうとした。こんな炭焼小屋みたいなところで、子供を生んでも、食わしていけるあてもなく、その頃も数年つづきの冷害で凶作ばかりだったからね。生まれた時にも、男の子だとわかった時には、しめ殺そうかと考えたんだよ。女の子なら売れるけれどね。堪忍しておくれ。だから、お前は私を食べてもいいんだよ。そういうめぐり合わせなんだから。そして元気になったら私の骨を、神部盆地の救霊会のお墓に埋めておくれ。誰にも言うんじゃないよ……。三十軒あった部落の人も全部いなくなってしまった。犬の子一匹いない。お母さんとお前だけのことなんだから。食べておくれ、私をお食べ……。私は死んでも潔の身体の中に、肉といっしょに魂も入って、お前を守っててあげる……。お前と私は、もともと一つなんだから……。
>
> お母さん。さようなら。
>
> それでも僕は……僕はやっぱり生きていけない。
>
> 「お母さん」枝ははげしく揺れ、千葉潔は母の名を呼びながら、慟哭した。そして次の瞬間、かれの身体はふわっと宙に浮いた。何ものかの、無限に寛大な何ものかの胸に抱かれるかのように……。

この代替的食人肯定思想の文学的表現の一節は、高橋和巳と実母との精神的救済関係の極限状況の事実をおもいださせる。彼は毎日、母が自分の命とひきかえに息子である作者の病気の治癒を、天理教の「おさづけ」の取次をとおして真剣に親神に祈願していたことを身をもって体感していたからである。前述のような心理の極限の描写をひきだす高橋の宗教体験は、その８年後に出版された作品『三度目の敗北』にもみられる。

> 病臥中、天理教徒である母は、毎朝、わたくしの枕元で祈りの言葉を挙げ、掌で私の腹部を少し空間を置きながら撫で下ろしてくれた。
>
> 「どうぞ、親神様、お助けを。三十八歳の次男をでございます。身になり替わりましての御加護を……。悪しきをはらい、助けたまえ、天理王のみこと……」

母が祈ってくれると、その指先を通じて、確かに何かの活力が、私の体に注入されるように感じられたものだったが、宗教は容認しながらもみずからは信じない私は、母の不眠不休の看護に感謝しながらも、その祈祷には同化できず、ひそかに呟いていたものだった。

このまま死ぬにせよ、生きながらえるにせよ、これが恐らくは私にとって３度目の敗北なのだ、と。

ここでわたくしにはなぜか二つのことが想い出された。その一つは、大本教の二代教主出口すみが、ただ一人の女性被告として長い未決生活を送るなかで、信者が面会に行くと、「今までいろいろの修業をさしてもらったが、牢の修業は今度が初めて、けっこうやで」とうれしそうにはなし、なぐさめに行ったものが反対になぐさめられて帰るのが常であったという。また６年余りの獄中生活の独房において彼女の膝にはいよるボッカブリ（ゴキブリ）と仲良しになったという有名な話がある。昭和25年頃、同志社総長・湯浅八郎がアメリカのシーベリー博士と一緒にすみを訪ね、この話を聞いて昆虫学を専攻していた湯浅には特別な思いがあったらしく、「あの時こそ、ここに人ありと思いました」とその感動を後ほど語って いたということである。万教同根・宗教帰一を理想とする王仁三郎が率いる破天荒な父性的大本教の背景にある母性的感性を象徴する実話の一端を『大本・教祖伝　出口なお・出口王仁三郎の生涯』（伊藤栄蔵、天声社、182頁）から紹介しておきたい。

> ボッカブリの夫婦がすみのもとへ毎日やって来るので、弁当を少し残しておいてやる。それを食べて膝の上をはいまわっては帰えるボッカブリ。ところが或る日、一匹だけが来ていかにもさびしそうだった。次の日も、また次の日も一匹だけが来た。すみは心配して看守にたずねた。
>
> 「私のところへ毎日遊びに来るボッカブリが一匹見えませんが、何かお心当たりがありませんか」
>
> すると、
>
> 「あ、それやったら二、三日前廊下で一匹踏み殺されていた」と答えが返ってきた。残った一匹はどうやら雄らしい。すみはその雄に話しかけてやった。
>
> 「嫁さん亡くしたんか、かわいそうやのう。早う次のをもらいなよ」
>
> それから幾日かして二匹が来た。後方に従う一匹は恥ずかしそうにしている。
>
> 「お、お前嫁さんになってくれたんか。こっちへ来い、こっちへ来い」
>
> するとだんだん近よって雄と一緒に食べ物を食べ、それからまた毎日二匹が来て膝で遊んだ。ところが、のちにすみは控訴審のため大阪の刑務所に移された。ある日京都に残してきたボッカブリが、しきりに思い出されるのか、こう呼びかけている。
>
> 四年（よそ）を馴れなじんだるぼっかぶり　妻はまめ
>
> なか子らは増えたか

獄中のすみは窓の外の雀と話したり、幼いころの思い出を童謡のような歌に綴ったり、すみの未決生活がそのまま美しい詩であり、看守たちがすみを慕ってたびたび天恩郷を訪れていたと伝えられる。第二次大本事件では、幹部と共に拘束され、保釈されるまでの６年余の獄中生活を送っている。